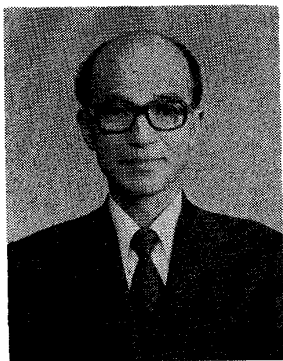


随 想

会長就任のごあいさつ

荒 木 透*



日本鉄鋼協会は 63 年の古い伝統と学術、技術の広い領域にまたがる広範な事業活動により、近年のわが国鉄鋼協会の中における位置づけと役割りにますます重きを加えつつありますことは御同慶に耐えません。

このたび諸先輩の皆様、理事各位の御推挙によりまして、はからずもこの大学の会長の任を負うことになりました。まことに光栄の至りでありますと同時に、その重責の大なることを痛感致しております。非才の私にとりましてできうことに誠心、最善をつくしたいと存ずる次第であります。

本協会は鉄鋼の精錬、加工、処理、管理などの製造技術のみならず、鉄鋼材料の性質、用途に関連した学術、技術を幅広く取扱っており、事業内容は鉄鋼関連の工業の発展と、これを支える基盤となるべき科学技術の振興に重要な使命を果たして参っております。

現場技術に直結した面では、協会の春秋の講演大会、共同研究会、標準化委員会、その他本部支部各種の講演会、討論会などが会員の知識の相互研鑽、情報の交換、技術教育などに大きく貢献しつつあることは評価されましょう。また近年重要性を増して参りました自主開発技術に関連するポテンシャルを高めるためには、さらに基礎科学面との連携について鉄鋼基礎共同研究会、特定基礎研究会などの今後の役割りの向上が期待されます。

また一方、機関誌「鉄と鋼」は研究論文発表を主とする情報交換の場と技術教養資料を提供し、同時に会員への公報媒体の役割りを果たしつつあります。協会と個々の会員との結びつきの一層の緊密化は、会誌を通じてのより一層のサービスによつて今後ともつねに向上されるべきものと考えられます。限られた紙面をいかに有効に用いるかはつねに新しい課題でありましょう。国際誌 Transactions ISIJ の使命の強化は併せて研究されるべき将来の希望の命題となりましょう。新たに開設されました鉄鋼技術情報センターの役割りも今後の大きな発展が期待されるものであります。

終りに、先般シカゴで開催されました第 3 回鉄鋼技術国際会議に出席して感じましたことを一言申し添えたいと思います。御承知のごとくこの会議は、1970 年当協会の主催により創始されました鉄鋼科学技術国際会議（東京）のあとを受けて、1974 独乙（デュセルドルフ）に引き続き本年 ISS・AIME、ASM の共催により開かれたものであります。

* 本会会長 科学技術庁金属材料技術研究所所長

経済外交の面で、目下の日本はややもすれば外国から厳しい批判的感情を向けられる難しい国際環境の中に立たされております。しかし現在日本の鉄鋼につきましては製造技術の向上による価格低減の成果のみならず、製品の品質が優れ非価格的な競争力もまた優位に立っていることが実体であることが感ぜられました。このような条件にあるときこそ、技術面での対外的な親交関係をこちらの側から樹立するよう働きかけることの大切な時期といえましょう。

鉄鋼の技術には今後に拓かれるべき革新技術を目指して多くの課題があります。国際的に研究者、技術者相互間のよりよき友好関係を築き、相互啓発を実施し、人類の福祉を目指してよりよく理解を深める機会をできるだけ多く持つことが大切なことかと思われます。このことはまた、経済関係面の軋轢からくる国と国との各種の現実的な摩擦を緩和する上に役立つ処が大きいと信ぜられます。

国内における大学、中立研究機関ならびに産業企業の各単位で行なわれている鉄鋼に関連した研究の横の協力連けいの面におきまして、当協会が果たしつつある役割りは前述のように極めて大きいものがありますが、同時に今後国際的な協調の視点に立つた協会事業の重要な役割りに関して認識を新たにしたい次第であります。